SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ウイグル人の中国文化大革命：既往研究と批判資料からウイグル人の存在を抽出する試み (中国文化大革命と国際社会：50年後の省察と展望：国際社会と中国文化大革命：フロンティアの中国文化大革命)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009406

ウイグル人の中国文化大革命
―既往研究と批判資料からウイグル人の存在を抽出する試み―

楊　海英

はじめに

1980年11月20日から、いわゆる「林彪・江青反革命集団」に対する裁判が北京でおこなわれ、最高人民検察院特別検察庁は起訴書（状）を読みあげた。2万字を超える起訴状には同集団の「四大罪状と48箇条の罪行」が列挙され、そのなかには「内モンゴル人民革命党冤罪事件」と並んで、「新疆叛徒（裏切り者）集団冤罪事件」もカウントされている。「新疆叛徒集団冤罪事件」も「内モンゴル人民革命党冤罪事件」同様に、中国共産党の諜報機関のトップ康生が主導したものと位置づけられている。具体的には新疆の実力者盛世才督弁によって1942年に逮捕された経歴をもつ共産党員131人を康生が「叛徒」として疑い、粛清した事件を指す。92人が迫害をうけ、26人が死亡したという（本刊編輯部　1980:77–83）。

この起訴書はいわば、文化大革命（以下文革と略す）の「首謀者」らに対する中国政府からの公的な清算書である。「清算書」は共産党内部の政治闘争を物語っており、新疆ウイグル自治区における被害状況に触れてはいるものの、被害者は中国人すなわち漢人[1]の共産党員ばかりで、まるでウイグル人は文革に参加しなかったかのような筆致である。文革の負の性質を清算しようとしても、中国人はウイグル人に関心がなかった事実を表している。いや、関心がなかったわけではない。ウイグル人と外来の中国人の間には深刻な民族問題が20世紀以来ずっと存在しつづけ、中華人民共和国が成立してからも一向に好転しなかったどころか、逆に文革中は「ソ連修正主義者」あるいは「社会帝国主義のソ連」と連動する形で悪化していたのである。「清算書」はそのような事実をも隠蔽する為に、あえて責任の一端を「全国人民の偉大な領袖毛主席」の夫人江青と「親密な戦友にして後継者」の林彪になすりつけようとしなかったのである。

結論を先に示しておくが、文革中も新疆ウイグル自治区には民族問題は存在していただけでなく、一層激化していた。中国人同士の文革は造反対保守の形で展開されただろうが、ウイグル人は造反の潮流に乗るようにしてそれまで政府に抑圧されてきた不満を吐きだして是正しようとしただけでなく、なかには武装闘争の道を歩

---

[1] 私たちモンゴル人は、「中国人すなわち漢民族」であると理解している。モンゴル人やチベット人、それにウイグル人は単に国籍上、中華人民共和国の国籍が与えられているだけで、中国人ことChineseではない、とのアイデンティティを維持している（楊　2014:4–5;2015;2016a:89）。

む者もいた。こうした事実は日本には伝わらなかったが、早くも同時代の中華民国台湾の研究者らによって指摘されていたし、中国側も21世紀に入ってから文革中に複雑化した民族問題を認めるようになった。認めた上で、今日におけるウイグル人による「民族分裂的活動」や「恐怖活動」もすべて文革期までつながるとの立場を取っている。こうした認識上の変化は、中国の民族問題を激化させたのは文革期の政策である、と私が以前から指摘していた議論と一致するし、逆にいえば、少数民族地域においては、中国政府の政策と手法は文革期とほとんど変わっていないのである（楊　2009a,2009b:248–251）。以下において、私はまず現在の中国政府の公的な歴史が新疆ウイグル自治区の文革をどのように記述しているのかを整理する。その上で既往研究を整理し、一つの批判資料を紹介する。批判資料とは、中国人が書いた、ウイグル人の「民族分裂主義者」に対する断罪書である。既往研究と限られた批判資料であっても、そこには従来意図的に無視ないしは抹殺されてきたウイグル人の文革中の政治的な姿が隠されているのではないか。

一　共産党政府見解のなかの新疆文革

新疆ウイグル自治区の文革について、政府はどのように記述し、認識しているのか。ここで一例として「マルクス・レーニン主義と毛沢東思想、そして鄧小平の中国的特色のある社会主義建設の理論に基づいて編纂された」『当代新疆簡史』を挙げよう。『当代新疆簡史』は「新疆の文化大革命は党中央の指示にしたがい、北京と上海等といった大都市の影響の下で、少しずつおこなわれた」、としている（党育林　張玉璽　2003:2,241）。

『当代新疆簡史』は北京からの紅衛兵が1966年8月末に新疆ウイグル自治区に経験交流してきたのを受けて、9月に「ウルムチ大中学校紅衛兵総部準備委員会」が成立し、10月には「新疆紅衛兵革命造反司令部」が、そして11月には「新疆紅衛兵無産階級革命司令部」が誕生したと書いている（党育林　張玉璽　2003:243）。これらの紅衛兵組織はそれぞれ別個のものなのか、それとも再編をくりかえして形成されたのかについては、触れていない。9月2日に自治区の第一書記王恩茂[2]が紅衛兵を歓迎する講話を披露したものの、「首都紅衛兵」と地元の学生たちの反発を受け、翌日には党委員会の建物の前で抗議活動が発生した。『当代新疆簡史』はこれを「九・三事件」と呼んでいる（党育林　張玉璽　2003:243）。当時の造反派の紅衛兵は「九・三事件」は「王恩茂ら保守派が発動した、造反派を弾圧する為の白色テロ」だと批判していた（新疆紅二司宣伝部・『新疆紅衛兵』報編輯部　1967）。

---

2)　王恩茂は江西省の出身で、1928年に紅軍に参加し、1955年に中将となる（丁盛　2008:165）。

翌1967年の1月に東南沿海部の上海の奪権運動のニュースが西北のウルムチ市に伝わると、造反派は『新疆日報』の「権力を奪った」。そして、1月26日にはウルムチ市の西北にある石河子に駐屯する生産建設兵団第八師団（略して農八師）の群衆組織同士が衝突し、27人が死亡し、70余人が負傷する事件が勃発する。4月以降、「林彪と江青の走狗ども」である「造反派のボス楊立業と呉巨輪」らが人民解放軍の管理下におかれていた『新疆日報』を占拠した。人民解放軍の権威が傷つけられ、武闘が多発するようになる。文革中には新疆で計125件の武闘が起こり、死者は700余人で、負傷者は5,000人に達した（党育林　張玉璽　2003:243–246）。

新疆軍区の要請を受けて、毛沢東と党中央は1968年夏に湖南省革命委員会の第一副主任の龍書金を新疆軍区司令官兼党委員会第一書記として派遣した。9月5日になると、「台湾を除いて、全国最後の省クラスの革命委員会として新疆ウイグル自治区革命員会とチベット自治区革命委員会が同時に成立した」。そこから、「林彪・江青集団」による前書記の王恩茂に対する批判がエスカレートする。少数民族地域では「叛国外逃集団」の摘発が進められ、中国人すなわち漢人のなかの「反革命集団」を発見していった。1971年9月13日に林彪がモンゴル人民共和国で墜落死した後も、「自治区の主要な責任者は意図的にニュースを知らせようとせずに、10月1日の『新疆日報』と自治州などの地方各紙はひきつづきそろって林彪の大寸法の写真を載せた。そして数十日間にわたって林彪語録を転載するなど、悪質な政治的影響を残した」という（党育林　張玉璽　2003:246–251）。

以上のように、『当代新疆簡史』は文革の全責任を完全に「林彪・江青反革命集団」に帰すという官制史観に沿って記述している。群衆組織同士の武闘も何を巡って対立し、書記の王恩茂と湖南省から派遣されてきた龍書金はそれぞれどういう系統の人物なのか。そして、どの少数民族地域でいかなる「叛国外逃集団」があったのか、など詳しい情報は一切示していない。また、「党中央の指示にしたがって推進された」と標榜しながらも、共産党の政策が現地にいかなる影響を及ぼしたのかについても、具体的に述べていない。こうした疑問を解決するには、当時の第一次資料を分析し、そして文革と同時進行していた中華民国台湾の中共観察の成果を検討しなければならない[3)]。

私の手元に『新疆紅衛兵』という「新疆紅衛兵革命造反司令部（略して紅二司）」

---

3) 台湾の中華民国側の中共観察と研究は、情報が豊富な上、分析者たちの一部はもともと共産党からの転向者であった為に、分析は鋭い。欧米の中国研究者は積極的に1950年代から台湾の研究成果を利用してきたが、日本の中国研究者は独特な対中配慮と先の戦争に対する反省、そして進歩主義的で、マルクス主義歴史観を信仰していた為か、台湾を「反動的」だとみなし、その学術成果を敬遠してきた。私は以前に内モンゴル自治区の指導者ウラーンフーが粛清された事件について調べた際に、台湾の内モンゴル研究を利用したことから、そのレベルが高かった事実に気づいた（楊　2011）。日本の中国研究者は、イデオロギー的な陥穽に堕ちたがゆえに、現代中国研究の水準を一時的に落としたと言わざるを得ない。

が編集し発行していた新聞がある。この『新疆紅衛兵』第13期（1967年8月9日）と『新疆紅衛兵・風雷』（新疆紅二司・新疆軍区兵団革命造反派、1967年8月24日）には「新疆における二派の規模と組織状況の紹介」という文があり、造反派と保守派に関する情報を以下のように提供している。

造反派：
新疆紅衛兵革命造反司令部（紅二司）
新疆軍区兵団農学院革命造反司令部（兵農造）
新疆軍区政治部文工団喀喇崑崙革命造反団・軍区歩校造委会・軍区評劇団戈壁烽火
新疆革命職工造反総司令部・新疆工交戦線造反総司令部（職工総司、工交総司）
新疆文芸界革命造反司令部・新疆新聞界革命造反委員会

保守派：
新疆紅衛兵革命造反第一司令部[4]（紅一司）
新疆紅衛兵無産階級革命司令部（紅三司）
新疆鳥魯木斉（ウルムチ）地区大中院校紅代会促進委員会（紅促会）
新疆軍区生産建設兵団「八一野戦軍」（八野）
工農聯合革命委員会（工農革委会）

では、台湾の中華民国側の研究者たちはどのように新疆ウイグル自治区における文革を理解していたのだろうか。

二　中共観察のなかの新疆文革

中華民国の国家安全局が編集していた『匪情月報』は早くも1950年代から「偽新疆ウイグル自治区」の少数民族問題に注目していた。たとえば、司法行政部調査局が1958年に公開した「新疆民族之分離運動」は1957年12月16日からウルムチで開かれた幹部拡大会議の席上で、反右派闘争が正式に「反地方民族主義」に舵を切った事実に着目している。「新疆民族は以前から民族自決を求めていた」が、そのリーダーたちが粛清された現象を司法行政部調査局は分析している。『匪情月報』が整理している「地方民族主義者」は以下の通りである（司法行政部調査局　1958:45–46）。

サプライェフ[5]（賽甫拉也夫）：新疆ウイグル自治区党委員会書記処書記

---

4)　紅促会系統の新疆紅衛兵第一司令部は『反修紅衛兵』を編集して発行していた。
5)　以下、本論文におけるウイグル人の名前のカタカナ表記は、静岡大学人文社会科学部に留学中のウルムチ出身のウイグル人学生にご教示いただいたものである。

イミンノフ（伊敏諾夫）: 新疆行署主任などを歴任し、自治区党委員会常務委員

エサハディ（艾斯海提）: イリ・カザフ自治州政府秘書長などを歴任し、自治区党委員会常務委員

ズヤ・セメティ（孜牙・賽買提）: 自治区文化庁庁長

イブライントルティ（依不拉音吐爾的）: 自治区民政庁庁長

アブドゥリム・エサ（阿不都烈依木・艾沙）: 自治区党委員会委員候補、イリ・カザフ自治州副州長

ア・サイド（阿・賽徳）: ウルムチ市市長

アブレズ・カーリ（阿不列孜・卡里）: 自治区商業庁副庁長

以上のような代表的な「地方民族主義者」たちは以前から「民族自決」を求めていたし、新疆ではほかにも自治区の名を「ウイグルスタン」や「東トルキスタン」に変更するよう求める動きがあり、こうした行動はすべて「漢族を排斥し、民族間の団結を破壊した」行為だとして政府から断罪された。共産党も実質的には「漢族の政党だ」とウイグル人側に不満が蓄積している点を並べて、論文は新疆における民族間の対立について分析している。ひたすら民族問題の存在を否定し、特に少数民族側にどんな不満があるのかすら調べようともせずに、また真摯な態度で解決しようとする態度もない中国共産党側の研究者や政治家たちに比べると、中華民国側の指摘は最初から問題の本質を理解していたといえよう。後日になって一応、反右派闘争期に右派とされた人物たちの名誉を回復した中国であるが、『当代新疆簡史』はユニークな見方を示している。「自治区で展開された反地方民族主義の闘争は、民族間の団結を強固にし、祖国の統一を維持するのに必要であった。ただ、拡大化してしまった。運動中に地方民族主義分子とされた者は1,612人に達する」（党育林　張玉璽　2003:192）。

周知のように、中国ではいったん、何らかの政治的なレッテルを貼られて粛清されると、いくら「名誉回復」されても、二度と元通りの普通の人生は送れない。「祖国の統一と民族間の団結の為に必要で、ただ拡大してしまった」との公式見解は、少数民族の知識人や政治家を完全に軽視した言説である。こうした詭弁に満ちた言説は内モンゴル自治区でも見られた。少なくとも34万人が逮捕され、12万人に身体障害を残し、27,900人が殺害された「内モンゴル人民革命党粛清運動」等についても、「中国人民の偉大な領袖毛沢東と人民の好い総理周恩来」は「粛清は必要だった」、ただ「拡大してしまった」と弁じていた（楊　2009a,2009b:81–83,2010:51）。このように、中国共産党は確かに部分的に反右派闘争と文革を否定しただろうが、両運動中に少数民族に対して実施した弾圧と虐殺は必要だったとの立場は基本的に変わっていないと理解していいだろう。

文革が勃発した次の年の春に、楊滄浩は動乱に陥った新疆について分析している。

動乱をもたらしたのは「二つの基本的な問題」だとし、ひとつは「民族問題」で、もうひとつは「生産建設兵団問題」だと端的に指摘している（楊滄浩　1967:75）。

まず、新疆には12の少数民族が居住し、中華人民共和国建国以前の総人口は480万人だったが、共産党は中国人すなわち漢人を移住させた為、1966年にはすでに700万人以上に達した。中国人移民を増加させて人口を逆転させようとする共産党の政策に各少数民族は強い危機感を抱いている。諸民族は以前にソ連の支援の下で民族自決運動を推進していたことから、中華人民共和国内でも生来の権利の保障を求めたものの無視された。中ソ関係の悪化[6]で1962年にはイリ地区の少数民族がソ連圏に逃亡する事件が発生しても、政府に良策はなかった（楊滄浩　1967:75–76）。

そして、もうひとつは生産建設兵団である（写真1）。共産党に帰順した元国民党軍をベースに、内地から新たにかつて割拠地延安で屯田していた王震部隊の侵入、知識青年の動員で漢人を増やす。屯田兵らを現地に定住させる為に、上海などから「売春婦を含む四万人もの女性」を派遣した。このような中国人入植者の増加に対する強烈な不満は、少数民族側に民族自決を求めてきた過去の運動を想起させ、動乱を更に拡大させている（楊滄浩　1967:76–78）。

写真1　新疆ウイグル自治区の北部、ジュンガル盆地のグルバントングト沙漠に残る生産建設兵団の白楊河基地の廃墟。兵団員はここでウラン鉱の採掘に従事していた。1991年6月、楊海英撮影

共産党の『当代新疆簡史』と異なって、台湾の研究者は特に生産建設兵団や人民解放軍の出自と構成に注目している。共産党や人民解放軍内部の派閥間の闘争が国家の政策にいかなる影響を及ぼしてきたかを秘匿する中国の研究者とは対照的である。新疆ウイグル自治区の場合、「反毛沢東派の賀龍」が1965年9月27日からウルムチ市で開かれた自治区成立10周年記念行事に参加し、旧部下たちを集めて会合を開いたことが毛沢東派に攻撃されていた。また、1966年3月には劉少奇も夫人の王

[6] 中ソ関係が悪化し、対立も先鋭化した1964年、中国共産党はソ連共産党中央宛の公開書簡で、「ソ連は中ソ友好条約を破棄して、……（中略）新疆において大規模な転覆活動を進めた」と非難している（人民日報編輯部・紅旗編輯部　1964:17）。

光美を伴ってパキスタンとアフガニスタンを歴訪した際に複数回にわたってウルムチ入りしていた事実も、毛沢東派から「反党活動を展開した根拠」にされていた、と分析している。新疆ウイグル自治区の書記王恩茂は「非毛沢東派」の一員で、毛に忠誠を尽くす「新疆紅衛兵造反司令部（紅二司）」に敵視されていた[7]。1967年1月26日に石河子で発生した暴力事件も、「王恩茂を支持し、反毛沢東の生産建設兵団八一野戦軍」が親毛派を弾圧するものだった。死者の数は100人以上に達する（楊滄浩　1967:78–80）。このように、台湾側の観察者は詳細なデータを示しながら中国人同士の武装闘争に注視している。私の手元にある紅二司の機関紙『新疆紅衛兵』（第13期、1967年8月9日）も「石河子の流血事件は、王恩茂と丁盛らがその主人の葉剣英や徐向前の指令」にしたがって引き起こした「文革の造反派を鎮圧する」運動だと批判している。

新疆ウイグル自治区の党書記兼軍区司令官、政治委員の王恩茂と新疆軍区副司令官の郭鵬、副司令官の徐国賢、副政治委員の左斉と張仲瀚など、党と軍の実力者はすべて紅軍第二方面軍の賀龍の部下である。彼らは新疆で「独立王国」同然の拠点を作っていた為、毛沢東・林彪系統の指揮がほとんど及ばなかった、と早くから指摘しているのは丁望である（丁望　1967:93–94）。

上で紹介した楊滄浩は1966年の新疆ウイグル自治区の人口は約700万人だとしているのに対し、1968年に書かれた操青の論文はロンドンからの報道を引用する形で、1967年における同自治区の人口はすでに1200～1500万人に達していると驚きを隠さない。そのうち先住民のウイグル人は約366万人で、カザフ人は51万人で、キルギス人は7万人で、その他の民族は1千人～6万人の間である。こうした人口構成が、中国人の植民が急ピッチで増加し、現地のバランスが破壊され、少数民族の不満を爆発させている最大の要因となっている（操青　1968:21）。少数民族側に大きな不満が鬱積しながらも、ウルムチ市とその周辺の武闘は中国人同士で展開された。操青はつぎのように述べている（操青　1968:23）。

> 新疆地区の武闘は主として新疆ウイグル自治区党委員会の武光と呂剣人、それに新疆軍区第一副政治委員の左斉[8]らが率いる「紅二司」と「兵農造」、「新工総」らの革命的群衆組織と新疆軍区司令官王恩茂、副司令官の張希欽ら新疆ウイグル自治区党委員会と軍区の指導下にある「紅一司」と「紅三司」、紅促会、四野（農四師）、七野（農七師）、八野（農八司）、工促会、農促会、聯促ら保守派の群衆組織との間の衝突である。表面上は群衆組織同士の武闘であって

---

7) 私の手元にある、新疆紅衛兵革命造反司令部が出していた『新疆九・三風暴』の1967年9月14日号は「王恩茂は修正主義者の劉少奇の新疆における手足だ」との批判文を載せている。

8) 保守派の新聞『反修紅衛兵』の1968年2月20日号は左斉を「賀龍の黒い手先」だと批判している。

も、実際は匪党の中央文革（小組）が支持する革命造反派と匪党新疆党委員会や軍区間の闘争である。

新疆ウイグル自治区党委員会と軍区の有力者たちが「匪党中央」と対立するのは、王恩茂書記兼司令官はもともと彭徳懐と賀龍の系統に属すからである。彭徳懐が蘆山会議で粛清された後、西北地域においてもっとも影響力を保持していた同系統の実力者は王恩茂しか残っていなかった。そのような王恩茂を造反派の力で打倒して北京に抑留してから、毛沢東と林彪は自派の丁盛将軍を新疆軍区副司令官として派遣して全権を把握した（操青　1968:22–23）。

新疆ウイグル自治区における最大の「反毛集団」は生産建設兵団（図1）で、この兵団が不穏な状況に陥ると、ソ連と強いつながりを有するウイグル人らも再び動く可能性がある、と操青は指摘する。カザフ共和国の首都アラマータに「新疆民族の独立を支援する総部」が設置され、亡命したウイグル人たちを訓練しているとの情報と合わせると、新疆ウイグル自治区の動乱は続くだろう、と結論づけている（操青　1968:24）。

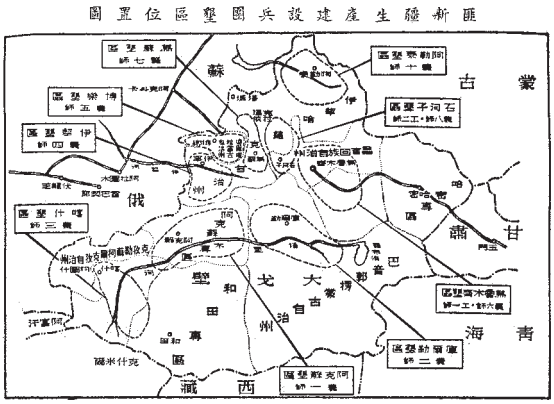

図1　新疆ウイグル自治区における生産建設兵団の配置。楊滄浩「当前新疆動乱問題的探討」より転載

台湾の中共観察者は新華社のニュースと現地の群衆組織が刊行していた各種の紅衛兵新聞などを使っている。そのうち、朱文琳は北京に一時抑留されていた王恩茂を新疆ウイグル自治区革命委員会が1968年9月5日に成立した際に、なぜ副主任としてウルムチ市に迎え入れたかに注目している。この時点で、彭徳懐と賀龍系統の軍人はほぼ粛清されて脅威がなくなっていた[9]し、党中央もまた王恩茂の「功績が大きかった」点を考慮したという（朱文琳　1968:13）。

---

9)　毛沢東と林彪グループがいかに彭徳懐・賀龍系統の王恩茂の軍権を奪いとったかについては、方君帰の論考がある。奪権のなかで特に重要な役割を果たしたのが、林彪の嫡系部下の丁盛である。丁盛は1962年に中国軍の第54軍を率いてインドに侵攻した功績をもつ。1964年になると、北京での研修を終えた丁盛は新疆生産建設兵団の第一副司令官として派遣される。ここから王恩茂一派に対する粛清の準備がスタートする（方君帰　1969:39–44）。尚、丁盛自身も自らが新疆ウイグル自治区で経験した文革について回想している。彼は後に1968年から広州軍区の副司令官に転出するが、林彪が墜落死したことで失脚する（丁盛　2008）。

彼は30万人の屯田兵と200万人以上もの移民を率いて新疆の辺境防衛を固めた。何よりも王匪恩茂は1958年の新疆の分離運動を消滅し、ソ連とインドの介入を防いだのである。……（中略）王匪が徹底的に毛匪と訣別して叛乱の旗を立てなかったのは、毛匪が王匪に寛容的だったことと、王匪の政治的影響力を考慮したからだろう。また、王匪は責任感からソ連の新疆に対する野心と少数民族側の分離独立の傾向を警戒していた。新疆が動乱に陥れば、狭隘な地方民族主義はそれに乗じて膨張し、ソ連帝国主義者もまた闖入し、新疆が中国の版図から分裂するのをもたらす。王匪と毛匪、ソ連と少数民族といった諸要素間の微妙な関係が新疆のバランスを維持している。

朱文琳はこのように「毛匪」の政策を批判しながらも、新疆ウイグル自治区が中国の版図から逸脱するのに危機感を抱いている。国民党は「匪党」と異なるイデオロギーを有し、台湾に偏安政権を建てても、中国人が一方的に描く「大中華」の夢は同じらしい。

朱文琳はまた「匪党」がウイグル人の政治家ブルハン（包爾漢、写真2）とイミンノフを批判している事実を取りあげている。ブルハンは「古参のソ連のスパイ」で、1964年に粛清されていた[10]。一方、イミンノフは「イリ叛乱（三区革命を指す－著者）集団のボス」で、1957年に新疆独立を唱えた為に打倒されていた。ここに至って、再びブルハンとイミンノフという二人のウイグル人政治家の「旧罪」を掘り起こしたのも、新疆ウイグル自治区には外国のソ連からの干渉と、内部のウイグル人の分離独立の危険が存在するという危機感を創出して共産党の統治を有利に進める為だ、と指摘する。こうした政策と謀略も効果は限定的で、紅衛兵によって破壊されたイスラームの施設が多く、ムスリムの諸民族は大きな不満を抱いているとも論じている（朱文琳　1968:8–13）。朱文琳が触れたイミンノフに

写真2　ブルハン（左端）と王震（中央）、王恩茂。中国人の王震はウイグル人の帽子をかぶって、「民族団結」のパフォーマンスをしている。包爾漢著『新疆五十年』より

[10] ブルハン（1894–）は帝政ロシアのカザンに生まれている。恐らくはタタール人であろうが、その後1912年に新疆に移住し、後に1944年の「三区革命」に参加し、中華人民共和国の成立後はウイグル人と自称してきた。彼は自らの経歴を中国の革命史観に合わせて『包爾漢―新疆五十年』（包爾漢　1984）という自伝にまとめている。

ついては、のちにまた詳しく述べる。

恐らくは依拠した資料類が同じだった為か、朱文林のような台湾側の研究成果と同じような見解を示しているのが、マクミランである。マクミランは次のように論じている。「そもそも新疆のプロレタリア文化大革命が王恩茂の長期にわたる地方支配と漢人関係者の手でほぼ仕上げられた毛―林彪の北京に於ける派閥との間の権力闘争を形あるものにしたのである」。そして、「少数民族の間に何が起きたかほとんど何も公表されていない」、とマクミランは嘆いている。「ソビエトが自治区の内部的混乱と派閥抗争の機に乗じて、非漢民族の間に社会不安を根づかせる危険があることを北京は見過ごせなかった」為に、王恩茂は生き残ることができたという（マクミラン　1983:148,153）。

以上のように、従来の新疆ウイグル自治区の文革に関する研究は、御世辞にもウイグル人を登場させたものはほとんどない。すべて中国人それも生産建設兵団とその周辺の「革命的群衆組織」の動きをめぐるものばかりである。それは、自治区のありとあらゆる権力を完全に外来の中国人が掌握し、ウイグル人は真の意味での自治区の主人公になれなかったからであろう。ウイグル人が自らの故郷において、生来の権利と権力をすべて失っていったプロセスについて、台湾の研究者呉啓訥はつぎのように整理している。ウイグル人はもともと1940年代末からソ連型の高度の自治を「ウイグルスタン」でも実施するよう要求していたが、中共は高度の自治どころか、逆にその他の諸民族、カザフやキルギス、モンゴルと回民などにも区域自治権を付与する形で、最大の民族であるウイグル人の力を削いだ。諸民族一視同仁との看板の下でウイグル人の自治権を架空のものとして、諸民族の力を相殺する効果を機能させた（呉啓訥　2009:94–96）。

ウイグル人はあらゆる権利が奪われても、文革は彼らと無縁ではなかった。ウイグル人が文革中にどのように扱われたのか。また、ウイグル人はどのように行動したかについて考えなければ、新疆ウイグル自治区の文革もその全貌は解明されたとは言い難いだろう。

三　批判資料が語るウイグル人の文革―イミンノフを事例に

中国人が作成したウイグル人批判の資料

私の手元に一冊の「批判資料」がある。題して『反革命修正主義分子にして反革命の現行犯であるイミンノフの反党、反社会主義、反毛沢東思想の罪行と言論摘編』（反革命修正主義分子、現行反革命犯伊敏諾夫三反罪行言論摘編。付録資料参照）である。この資料は「新疆ウイグル自治区のウルムチ地区工代（工人代表の略―著者）促進会・自治区人民委員会機関毛沢東思想を守る戦闘兵団（捍衛毛沢東思想）・ウル

ムチ市印刷廠紅星野戦兵団」が1967年12月に編集し印刷したものである[11]。批判資料の「編集者解題（編者按）」には1967年12月10日との日付があり、同資料を第一集として位置づけているが、その後、継続的に発行したかどうかは不明である。「批判資料」を編集し、印刷して広げた三つの群衆組織の性質についても、私は詳しい情報をもたないが、名称からみれば、「工代促進会」と「印刷廠紅星野戦兵団」は労働者の組織で、「自治区人民委員会機関」は自治区の共産党委員会に勤める幹部たちからなるのが普通である。前に紹介した『新疆紅衛兵』（第13期、1967年8月9日）における分類にしたがえば、「紅促会」は保守派になる。また、批判資料は文中で自治区の党書記王恩茂に「同志」を付けて呼んでおり、イミンノフが「王恩茂同志を悪意で以て攻撃した」と述べていることから判断すれば、これら三つの組織は保守派であると断定できよう。王恩茂がいかにウイグル人の地方民族主義や民族分裂的行動を阻止して祖国に功績を立てたかを誇示しようとするのが狙いのひとつである。新疆ウイグル自治区には深刻な民族問題が存在しており、そうした問題を抑えこんできた王恩茂を打倒するのは不当だと主張したい目的も兼ねた資料である。

以下では、この「批判資料」がどのようにウイグル人のイミンノフの「罪行」を列挙しているかを分析してみたい。言い換えれば、イミンノフのどんな行動と言論が中国人から問題視されたのかもこの「批判資料」から読み取れるのである。

批判資料の編集者解題は次のようになる。

> 北京衛戍（えいじゅ）区と新疆軍区はこのほどそれぞれ個別に反革命修正主義分子にして国民党の大物スパイ、反革命現行犯の黒い匪賊である武光と、頑迷な地方民族主義者にしてソ連修正主義の大物スパイ、反革命現行犯のイミンノフを逮捕した。これは自治区のプロレタリアート文化大革命が勝ち取った決定的で偉大な勝利で、無敵の毛沢東思想が得た偉大な勝利である。
>
> 「民族間の闘争はつまるところ、階級間の闘争である」、と毛主席はわれわれに教えてくれた。自治区が解放されて18年も経つが、二つの階級間と二つの道、二つの路線巻の闘争はずっと複雑で激しく、絶えることはなかった。イミンノフをボスとする反革命修正主義集団は長期間にわたって自治区の党と政府機関内に潜りこみ、太くて長いブラック・ライン（黒線）を形成した。彼らは反革命修正主義分子で、頑迷な地方民族主義者で、外国に密通する者である。いつか時期が来れば、彼らは政権を奪取して無産階級の政権をブルジョアの政権に変えるだろう。イミンノフはこの太いブラック・ラインの根本であり、総代表でもある。彼は自治区党内の最大の民族分裂主義者で、地方民族主義者からな

[11] 資料集の大きさは13.0cm × 18.5cmである。

る反党集団の総頭目でもある。彼はまたソ連修正主義者が新疆に伸ばしてきた最大のブラック・ハンド（黒手）で、大物のスパイで、徹底的なブルジョアジーの野心家にして謀略家でもある。……（以下略）

毛沢東の語録、「民族間の闘争はつまるところ、階級間の闘争である」を用いて少数民族側のリーダーを攻撃している点は、内モンゴル自治区で発動されたモンゴル人大量虐殺運動と完全に同じである。毛沢東の共産党中央は内モンゴル自治区でもまず「ウラーンフーの黒いライン（黒線）に属す者を抉りだし、その毒害を一掃する運動」から着手し、つづいて内モンゴル人民革命党員の粛清にすすんだ（楊2010;2011）。ブラック・ラインが「太くて長い」といったユニークな表現も同じである。

批判されるウイグル人の「罪」

批判資料はこのように総論を示してから、七つの部分からなるイミンノフの「罪行」を詳細に並べている。

第一に、「祖国の統一を分裂させ、新疆をソ連修正主義国家の植民地にしようとした」。（1944年に）「三区革命」が勃発した時期に彼は、「新疆は将来、ソ連の一共和国になる」と発言していた。新疆を共和国とし、名前も「ウイグルスタン」とすべきだとも提案していた。また、中国の憲法が少数民族に共和国建設の権利を与えていない点にも不満だった。

第二に「狂ったように漢族に反対し、漢族を排除し、悪意で以て生産建設兵団を攻撃し、民族間の団結を破壊した」。「あまりにも大勢の漢人がやって来た。漢人は多くの利益を手にし、現地の人々の生活向上にも影響をもたらした」、とイミンノフは話していた。また、生産建設兵団は開墾に適した土地を占領し、灌漑を独占したことで、現地のウイグル人住民との紛争が激化した点を強調した。「生産建設兵団は自治区政府の指導を受け入れずに、共産党の指示だけにしたがう。まるで第二の政府で、独立王国のように振る舞い、大漢族主義的だ」とも「攻撃」していた。人々の収入を民族別に分析してみると、漢人はウイグル人の6倍で、カザフ人の3倍だった。「新疆はウイグル人の地だったのに、漢人に占領されて中国の植民地となってしまった」、と批判していた（写真3）。

第三に、共産党の指導に反対し、党と政府の権力を簒奪しようと企んだ。1957年に「ブルジョアの右派どもが党に対して攻撃してきた」際に、イミンノフも「国内の情勢はわれわれに有利だ。怖がらずに、民族問題について語ろう」と呼びかけた。彼は、「大漢族主義に反対するのが主要な課題である。大漢族主義がなければ、地方民族主義もまたない。地方民族主義を克服する為には、まず大漢族主義を克服しな

写真３　新疆ウイグル自治区カシュガルにある入植者中国人すなわち漢人たちの正月を祝う舞台。ウイグル的な色彩は完全に排除されている。2013年、楊海英撮影

ければならない」とも話した。また、共産党は漢人の政党だ、漢人は党と政府のあらゆる権力を掌握している、などとの不満をもイミンノフは漏らしていた。

第四に、幹部の民族化を鼓吹し、祖国を裏切り、修正主義国家に投降する路線を進めた。「自治区がウイグル人を主体とする以上、主要な幹部も基本的に地元の少数民族、それもウイグル人を幹部としなければならない」とイミンノフは話した。さらに、「私たちのところは自治区だから、党書記もウイグル人がなった方がいい」とか、「何故、県以上の党書記は必ず漢人でなければならないのか。どうしてウイグル人は書記になってはならないのか」とも話していた。

第五に、党のあらゆる方針と政策に反対し、社会主義建設を破壊した。建国直後に政府は「反革命分子を鎮圧する運動（鎮反）」を実施したが、イミンノフはそれに不満だった。つづいて合作化などの公有化政策が導入されると、新疆は内地の真似ばかりして経済の停滞をもたらした、と彼は批判した。合作化により、新疆の農民と遊牧民の貧困化が進み、収入も減った。新疆から産出する綿花や食料もすべて内地に運ばれ、地元の生活が悪化した。中国政府は新疆、特に新疆南部のウイグル人地域の発展に力を入れようとしていない、とイミンノフは主張していた。

第六に、「辺境地区の住民を煽動して外国に逃亡し、伊寧市の5・29反革命暴乱を

企てた」。官製の『イリ・カザフ自治州志』によると、「ソ連の煽動により」、1962年5月中旬に伊寧市を州都とするイリ・カザフ自治州のカザフ人やウイグル人約6万人がソ連側に「違法的に脱走した（非法出走）」。5月29日、「ソ連駐伊寧市領事館に唆された一握りの暴徒」たちは州人民委員会を襲撃した為、ソ連領事館も閉鎖に追いこまれた（宋家仁　2004:51）。これが、いわゆる「5・29事件」である。中国側の書物には、政府の経済政策と少数民族政策に問題があり、カザフ人とウイグル人もそのような政府のやり方に不満が鬱積していたとの記述はまったく見られない。中国側に絶対に非がなく、専らソ連の「煽動」だけを極端に強調する見解である。

批判資料によると、イミンノフは、イリに住むカザフ人やウイグル人はもともと古くから自由に新疆とロシア（ソ連）の間を行き来していたので、越境も特別な行為ではないと認識していたという。1962年になって人々が大挙してソ連に逃げたのも、「伊寧市の失業者があまりにも多く、人民の生活は悪化し、配給される食料が一人あたり毎月4キロにも満たないのが原因だ」、とイミンノフは話していた。そして、自治区の中国人書記の王恩茂が「辺境地域に大量の漢人を入植させ、民族間の団結を破壊した」のも一因だ、とイミンノフは語っていた。暴動が発生し、伊寧市のカザフ人やウイグル人が人民解放軍に5月29日に鎮圧されると、「こういう時に、少数民族側にもし二個大隊ぐらいの軍隊さえあれば、こんなひどい目に遭わないのに」とイミンノフは嘆いていた。

第七に、イミンノフは「プロレタリアート文化大革命運動を破壊し、資本主義を復活させようとして反革命の世論を醸し出した」。具体的には、イミンノフは「王恩茂は一度も毛主席の言うことを聞こうとしなかった」、「王恩茂は民族問題の点で過ちを犯した」、「王恩茂は新疆の歴史上の反動派である楊増新と金樹仁、盛世才らが推進した大漢族主義を継承した」と党の指導者を批判した。また、「1962年に辺境の住民がソ連に越境していったのも、王恩茂の政策が原因だ」、「王恩茂は闘争の矛先を少数民族に向けようとしている」などと発言をくりかえしていた。

批判資料の性質

以上、七つの点から中国人に批判されているイミンノフであるが、その批判資料から読み取れるウイグル人政治家の姿は以下の通りである。

ウイグル人のイミンノフがもし本当に「新疆を自治共和国」にしようと語っていたならば、それは内モンゴル自治区を創建したウラーンフーと似ていると指摘できよう。モンゴル人のウラーンフーもまた「民族自決」を強調し、中華民主連邦内での自治を求めていた（楊　2012:154–163）。

イミンノフは1957年に反大漢族主義を強調した、と中国人は批判する。モンゴル人のウラーンフーも1965年末から社会主義教育運動（四清）を利用して、大規模な

反大漢族主義を展開したことで、共産党中央の不信を招き、粛清された（楊　2011）。ウラーンフーとイミンノフの運命は、いわゆる「大漢族主義と地方民族主義の双方に反対する」という毛沢東らの政策も所詮はジェスチャーに過ぎず、本気で進める政策ではないことを雄弁に物語っている。

イミンノフは党と政府機関の民族化を求めていたとの批判がある。この点もまた完全にウラーンフーと近似している。ウラーンフーも1957年から「党の指導機関の民族化」を強調し、部分的に実現していたが、のちにその政策もまた彼の「反党叛国の罪証」とされた（楊　2012:57–58）。自治共和国や連邦といった制度の実現が否定されると、残されたのは党政府機関の民族化しかない、とモンゴル人もウイグル人も理解していたからであろう。

モンゴル人の知識人や政治家は、中国政府が内モンゴルから資源ばかり略奪して内地に運び、モンゴル人地域の発展に無関心だと批判していた（楊　2012）。ウイグル人のイミンノフもまた北京当局の経済政策に満足していなかった。

中国の政策に不満だった新疆ウイグル自治区の少数民族は1962年5月から大挙してソ連側に逃亡した。いわゆる「イリ・タルバガタイ事件」である。内モンゴル自治区では翌1963年2月6日に「2・06事件」が摘発され、100人以上ものモンゴル人高官らが逮捕された。モンゴル人の知識人たちは、「2・06事件」は新疆の「イリ・タルバガタイ事件」と連動し、どちらも少数民族に不信を抱く共産党政府からの圧力が原因だと理解している（楊　2009a:225–230）。独自の軍隊をもたない少数民族はいつでも中国人に簡単に弾圧される運命にある。モンゴル人のウラーンフーもまた1947年に自治政府が成立する前に共産党側に対して、「国防軍のなかに少数民族単独の軍隊を創る」ことを求めていたが、実現できなかった（楊　2012:31）。

最後に、批判資料は特にイミンノフが自治区の中国人書記の王恩茂の政策に批判的だった点を問題視している。王恩茂を守ろうとの姿勢を全面的に出している事実から見ると、資料の書き手たちは保守派、それも新疆ウイグル自治区のありとあらゆる権力と権利を掌握してきた中国人既得利益者たちを守ろうとする中国人の群衆組織であることが明らかである。実際、造反派の『新疆紅衛兵・風雷』は「王恩茂は新疆における最大の外国に通じる悪者だ」との批判文を掲載し、「王恩茂とイミンノフとの親密な関係」を問題視していた（新疆紅二司新疆大学星火燎原兵団第七縦隊　1967）。中国人たちは、中国人入植者の利益を最優先としてきた王恩茂が造反派によって一時的に打倒されたことに強い危機感を抱いている。中国人同士の内紛、つまり造反派の思惑通りに王恩茂が失脚すれば、新疆で営まれてきた中国人全体の植民地的権益が台無しになるのを危惧して、闘争の矛先をウイグル人に転換させようとしている。真の敵は中国人の王恩茂ではなく、ウイグル人の政治家だ、と批判資料は喚起している。ウイグル人政治家の「罪」も文革中にだけ現れたのではなく、

その歴史から発見しようとしている。「抉りだして」みれば、1944年に「東トルキスタン共和国」が創建された時点から、イミンノフには数々の「民族分裂的な罪行」があった、と中国人は強調している。こうした手法もまたすべて内モンゴル自治区と同じである。モンゴル人ジェノサイドが発動された際に、中国人たちは1945年にモンゴル人が建てた「内モンゴル人民共和国臨時政府」と1946年の「東モンゴル人民自治政府」の存在を「民族分裂的」だと解釈した（楊　2010;2011;2012）。少数民族の「罪」はすべてその近現代史にある、と中国人はそう理解している。

四　事後の再解釈に反映される民族問題の実態

従来の研究と中国政府の公的な記録にはウイグル人がどのように文革期を過ごしたかは空白となっていた。この意図的に作られた政治的な空白は、決してウイグル人が文革中に「冬眠」、つまり中国政府と中国人の統治を甘受していたことを意味しない。中国から公開された史料は少ないが、21世紀に入って、新疆ウイグル自治区の民族問題が突出して現れるようになると、その問題を1960年代の文革中に発生した諸事件に遡って分析する傾向が顕著に現れてきた。遡求分析の結果、中国人が東トルキスタンを自国領として編入してから、ウイグル人によるレジスタンスは持続的に存在していた事実が明らかになった。

ウイグル人の抵抗運動と「祖国の利益」

馬大正、というモンゴル学者を自称するポリティシャンがいる[12]。彼は、「信頼こそ最大の尊重と愛情である」という江沢民総書記からの言葉を肝に銘じて、「新疆ウイグル自治区の書記王楽泉同志の支持の下」で、1990年代から「新疆の安定を強固にする」国家プロジェクトを担当した（馬大正　2003:251–252）。共産党政府の全面的なバックアップを得て、馬大正は2003年に一冊の提案書をまとめた。『国家利益はすべてを凌駕する―新疆の安定問題に関する観察と思考』(国家利益高於一切―新疆穏定問題的観察與思考）と題するこの書物は、実に詳細に文革中のウイグル人の「分裂的活動」について述べている（馬大正　2003）。皮肉にも、中国人の馬大正の著作はそれまでに中国当局が鼓吹してきた「社会主義制度下で繁栄し、発展してきた新疆における諸民族の調和」は嘘で、実際は「分裂的活動」がずっと続いて

[12] 私が国立民族学博物館教授松原正毅に追随して新疆ウイグル自治区で調査を始めた1991年に、馬大正という中国人のポリティシャンは私たちの調査隊にやってきて、延々と「新疆の安定化を図る為の共同研究」の実施をもちかけていた。彼のいわゆるモンゴル研究もほとんど漢文資料に依拠したもので、差別と偏見に満ちたものである。だいだい中国人の研究者は、その研究対象の少数民族の言語を学ぼうという意識をもたず、他の外国語の文献にも暗いので、専ら漢文資料を用いた成果は、レベルが非常に低い。

いた事実を公的に認めたものである。以下では、馬大正の報告書の内容を紹介するが、彼はあくまでも「祖国の利益を最優先としている」ので、ウイグル人の姿も悪意に満ちた文章で描かれていることをまず断っておきたい。

ウイグル人は中国人を「黒大爺（ヘイターイェ）」と呼ぶ（写真4）。このヘイターイェとはヒタイ（契丹）という古い中国や中国人を指す言葉だが、漢字で「黒大爺」と表現することで、「やくざ」とも同義となり、ウイグル人の素直な心情を代弁する呼称となった。馬大正は、早くも1956年5月に「平定」した南新疆で見つかった書物のなかに「黒大爺（ヘイターイェ）（中国人）が新疆を植民地にしている」との文言があったことから、「共産党に反対し、人民政府を転覆し、社会主義制度を破壊して、祖国の統一を分裂させようとする反動的な反革命集団はずっと潜伏してきた」、と解釈している（馬大正 2003:37–39）。注目しなければならないのは、馬大正が以上のように使っている表現はすべて文革の政治言語である。事実よりも、「反革命」云々のようなレッテル貼りに用いる言葉を一般的には文革の政治言語と呼ぶ（吉越　2005）。21世紀になり、文革を否定したといっても、それはあくまでも中国人内部のことに過ぎず、ウイグル人に対しては相変わらず文革の政治言語を使いつづけている事実は、少数民族地域での文革はまだ終わっていないことを意味している[13]。

写真4　新疆ウイグル自治区カシュガルに立つ毛沢東像。中国による支配のシンボルである。2013年、楊海英撮影

中国人がウイグル人の東トルキスタンを占領して「解放」した後も、「分裂的活動」が存在するのは、ソ連の「転覆活動」が原因だ、と馬大正は主張する（馬大正 2003:39）。ここでも、中国政府と中国人は自分自身にも少しは責任があるという姿勢を絶対に取ろうとしない。何かがあれば、その原因を「外国の一握りの反中国勢力と国内の極少数の分裂主義者の仕業」に帰す政治的な姿勢は今日も固く守られているのが中国である。馬大正はいう（馬大正　2003:39–40）。

（1960年代に）中ソ両党と両国の関係が悪化するにつれ、昔日の同志は敵に変

[13] チベット人の作家、ツェリン・オーセルも文革50周年にあたり、チベットでは1960年代と変わらない文革的な統治が続いていると指摘している（ツェリン・オーセル　2016:110–133）。

わり、反帝国主義の大後方も反修正主義の最前線に変化した。新疆地区の情勢も大きく変貌し、世界初の社会主義国家ソ連の存在はなんと新疆地区の分裂主義者分子どもが分裂的な活動を進める国際的な背景となった。分裂的活動をおこなう者も1950年代の国民党の敗残兵から政府機関内に勤める人員（なかには高級幹部も含まれる）と知識人、そして分裂主義的思想をもつ宗教人士に変わった。

馬大正は三つの事件を挙げて、具体的な「分裂的活動」の実態を示そうとしている。1962年の「5・29事件」と1968～1970年の「東トルキスタン人民革命党反革命集団事件」、そして1969年の「カシュガル地域メゲティにおけるアホンノフをボスとする武装暴動」である（馬大正　2003:40）。

文革後に語る文革中の「分裂的活動」

イリの「5・29事件」事件については、上で既に述べたが、馬大正は更に詳しい情報を提示している。1962年5月29日にイリ州政府を襲撃した「暴徒」の人数は2,000人以上で、政府の鎮圧により4人が射殺された。「暴徒」たちは「漢族を打倒せよ」とのスローガンを叫び、最終的には5万6千人が30万頭もの家畜を連れてソ連側に「逃亡」した。「ソ連に逃亡した新疆の分裂主義分子ども[14]はひきつづきソ連の支持の下で、わが国に対する破壊と転覆活動を実施した」、という（馬大正 2003:41–42）。馬大正が本当に客観的な立場に立つ研究者（モンゴル学者？）であるならば、少なくともそれまでに北京当局が施行してきた少数民族政策が適切だったか否か、急進的な公有化政策がもたらした悪影響などについても分析しなければならないが、彼にはそのような思考は毛頭なかった。

「ソ連の転覆活動」は次の「分裂的活動」につながる、と馬大正はいう。いわゆる1968～1970年の「東トルキスタン人民革命党反革命集団事件」と1969年の「カシュガル地域メゲティにおけるアホンノフをボスとする武装暴動」である。これらの事件は1968年7月に「発見」され、1970年3月に摘発されている。1973年までに調べた結果、ソ連は早くも1956年からスパイのトルスンラハモフ（吐爾遜熱合莫夫）を新疆に派遣し、自治区人民政府「東トルキスタン人民革命党」の副主席のザハロフと連絡し、「ウイグル共和国」を作って新疆を独立させる為に動いていたという（馬大正　2003:43）。

文革が勃発すると、独立の機会がやってきたと見たイミンノフとザハロフ、

---

[14] ソ連圏に越境したウイグル人たちのその後の動向については、水谷尚子による報告がある（水谷 2012:177–218）。

パティーハン（以上いずれも自治区政府副主席）らは裏でトフティクルバン（分裂主義分子で、元自治区出版社ウイグル文弁公室主任）とニイヤーズ・オマル（温泉県商業局副局長）、イスマイル・イブライン・ハサムパルサ（ソ連の古参スパイ、自治区対外貿易局絨毛廠副廠長）らを動かして謀略を企て、1968年2月に正式に「東トルキスタン人民革命党」という反革命組織を成立した。彼らはあわせて4回会議を開いた。

「反革命」の「東トルキスタン人民革命党」は12回にわたって26人をソ連とモンゴル人民共和国に派遣して、現地の諜報関係者と連絡し合った。1969年になると、12の専区と州（市）、126の県と自治区22の機関に78もの支部組織を作り、そのメンバーは1,552人に膨れ上がったという（馬大正　2003:43）。この「東トルキスタン人民革命党」はその党綱領のなかで、「新疆は古くから独立した国家だったが、近代に入ってから漢人の植民地となった」、「漢人の植民地的支配を打破して東トルキスタン民族の独立を実現するのがわが党の最終目標である」と掲げていた（馬大正 2003:43）。「中国社会科学院中国辺疆史地研究センター」の厲声によると、同党は『独立報』と『覚醒報』、『火炬（たいまつ）報』のような新聞と雑誌を発行して「分裂主義的思想を広げていた」という（厲声　2003:346）。

同党の主要なメンバーのトフティクルバンが1968年2月に新疆大学の群衆組織に監禁されたことで、その「陰謀」が暴露されたという（馬大正　2003:44）。馬大正の記述から見ると、同党が成立して2年の間、新疆の中国人たちはそれに気づかなかったことが分かる。そして、同党が「新疆大学の群衆組織」によって発見された事実も重要である。新疆大学の群衆組織は造反派かそれとも保守派かは不明であるが、ウイグル人に対しては、造反と保守の垣根を越えて、一致団結して対処していたことは明らかである。換言すれば、東トルキスタンのような少数民族地域に侵入してきた中国人たちはイデオロギーの面で対立し合うこともあるが、ことに少数民族に対しては常に思想的な違いを越えて連携し合っていたのである。このことは、王力雄が指摘しているように、辺境の漢族すなわち中国人は無原則に北京当局が進める少数民族弾圧政策を擁護し、場合によっては政府の尖兵の役割を担ってきた事実を示している（王力雄　2007）。

1968年8月20日、「東トルキスタン人民革命党」の「南新疆ブロック」の書記で、カシュガル市トラクター・センターのセンター長であるアホンノフが武装闘争を決行した。人民解放軍と武装警察に弾圧されて、5名の「暴徒」が射殺された[15]。1970

[15] 同じ2003年に出版された厲声の著作では、射殺したアホンノフ側の「暴徒」は10人だとしている（厲声 2003:348）。2009年に出た鐘民和の著書『一個真実的新疆』も1960年代の「民族分裂的活動」について述べているが、ほぼ厲声の文章を丸写ししている（鐘民和　2009:146–148）。

年に完全に摘発されるまでに、合計5,869人が逮捕され、そのうちの32人が死刑判決を受けた。かくして「新疆が解放されて以来、最大の反革命組織が殲滅されたのである」(馬大正　2003:43–45)。

以上が「モンゴル学者」から「国家利益研究者」に変身した馬大正の書いた「国家利益を最優先した」書物内の情報である。馬大正の観点に特に目新しい立論はない。彼は1964年に中ソ対立が激しくなり、「ソ連は新疆で大規模な転覆活動を進めている」という官制史観（人民日報編輯部・紅旗編輯部　1964:17）を焼きなおしたに過ぎない（写真5）。ただ、「国家利益を最優先した」為に、恐らくは党と政府が秘匿してきた档案類をふんだんに利用しただろう。少しもウイグル人の立場に立とうとしていない、と無理なことを中国人ポリティシャンに期待する必要もない。ただ、彼が描いている「分裂的な活動」も中国人から見た文革中のウイグル人の抵抗運動の一端だと思えば、それなりの意義は認められよう。

写真5　新疆ウイグル自治区アルタイ市に残るソ連領事館の建物。1991年、楊海英撮影

五　文革中の民族問題を刺激した要因

中国は自国に「民族問題」はないと強弁してきたにもかかわらず、21世紀に入ってからは大々的に新疆における「ウイグル人の恐怖（テロ）」を強調しながら、「国家利益を最優先」する抑圧的な政策を一層強めた。もちろん、新疆ウイグル自治区の民族問題、あるいは中国政府がいうところの「分裂的活動」も文革中にだけ発生し、激化したものではない。その直前の1962年の「イリ・タルバガタイ事件」、そして1957年の「反民族右派闘争」、建国直後の「反革命分子を粛清する運動（粛反）」などに遡って考えなければならない。中国における一般的な政治運営の手法として、どの運動も「拡大してしまった」とか「行き過ぎた」とか事後に部分的な修正を試みるが、負の連鎖は断ち切られることなく続く（楊　2016b:4–5）。民族問題も中国共産党の政策そのものに原因がある、と指摘しておかなければならない。

では、文革中に新疆ウイグル自治区など少数民族地域で発生した民族問題の性質について、従来いかなる指摘と分析がなされてきたかについて、再び台湾の研究者

たちの論考に注目してみたい。というのは、台湾の中華民国側は持続的にそのライバルを観察しつづけてきたからである。

民族問題が悪化したのは、共産党の対少数民族政策が変わったからだ、と喝破したのは邢国強である。中国共産党は1920年代に建党直後からソ連共産党に従い、諸民族には自決権を付与すると標榜していた。1945年4月に割拠地の延安で第七回全国代表大会を開き、『論聯合政府』を公開した際も、毛沢東は民族自決権を強調して国民政府との違いを鮮明にしていた。しかし、いざ建国するとたちまちそれまでの政策を大幅に変えて「区域自治」にレベルダウンした。まず、理論的には「プロレタリアート専制の必要性から、労働者階級が自らの地位を強固にする権利は諸民族の権利よりも上である」と位置づけて、労働者階級のない諸民族を漢族の下に置いた。最初から漢族を諸民族の上に配置することで、不平等な民族間関係が固定化された。つぎに、いわゆる区域自治もその中味は「分割統治」である。具体的にはチベット人の居住地域を意図的にチベット自治区と四川省、青海省、それに甘粛省と雲南省に分けて縮小した。モンゴル人の土地も内モンゴル自治区以外に東北三省と甘粛省、寧夏回族自治区に分け与えられた（邢国強　1976:41–42）。既に述べたように、新疆ウイグル自治区ではその内部に更にカザフ自治州や回族自治州を設けることでウイグル人の力を削ぐ政策が導入されたのである。

1980年代に入ると、中国共産党の少数民族政策の能動的な側面、言い換えれば少数民族を利用した国家戦略に注目した研究が現れた。例えば、中国はその民族問題を解決する為に、長期的な視野に立った政策を進めてきた、と郝致遠は指摘する。具体的にはまず大規模な移民をおこなって人口を逆転させる。中国共産党は移民政策を「国家計画に依拠した戦略的な後方建設」と呼んでいた。つぎに、漢族を移住させることでソ連の侵略を防ぐことができるだけでなく、少数民族の分離独立運動をも抑えることができると証明されたことで、今後は更に入植を増強するだろう。第三に、少数民族地域を足場に、対外干渉を試みるようになった。例えば、雲南の少数民族を利用してビルマ（現ミャンマー）の武装勢力を支援して政府を転覆しようと活動している。しかし、共産党は基本的に宗教を否定しているし、大規模な植民政策に対する諸民族の抵抗も強いので、結局は民族問題もより複雑化するだろう、と郝致遠は予想していた（郝致遠　1983:24–29）。

民族区域自治とは実質上は「分割統治」で、党の指導が区域自治法よりも上だという「党治国家」において、その党も実際は漢人すなわち中国人を代表している、と端的に指摘したのは、蔡国裕である。内モンゴル自治区の最高指導者ウラーンフーが粛清された後、すべての自治地域において、党書記を漢人すなわち中国人が独占している事実がそうした実態の表れである（蔡国裕　1984:17–24）。同じく新疆ウイグル自治区における文革について考察を加えた加々美も、「民族政策はあたかも漢

民族中心の国家利益擁護のためにのみ奉仕するものであったかに見えるほどである」、と結論づけている（加々美　2008:177）。いうまでもなく、中華人民共和国は「中華人民（チャイニーズ）」すなわち漢人の為の漢人による漢人の国である。国土開拓という対外膨張の為に獲得した少数民族の地域で実施した政策もすべて「中華人民」の利益を最優先する目的で制定され、実施されたものである。

おわりに

以上、さまざまな既往研究と限られた紅衛兵新聞や批判資料に基づいて、新疆ウイグル自治区における「主体」民族のウイグル人を文革の彼方から蘇生させようと試みてきた。ウイグル人だけでなく、新疆ウイグル自治区に住むモンゴル人もまた1964年からの社会主義教育運動中とそれに続く文革中に「モンゴル自治共和国」を創成しようとしたとされて、政府からの暴力を受けた。1985年から自治区党委員会政法委員会書記をつとめていたモンゴル人のバーダイによると、例えば、和静県バヤンブラク草原には10,596人のモンゴル人が遊牧していたが、そのうちの300人が粛清され、70人余りが殺害されたという。新疆ウイグル自治区のモンゴル人もソ連とモンゴル人民共和国と「結託」していたと批判された（巴岱　2009:795）。要するに、中国は常にウイグル人とモンゴル人の背後にはソ連とモンゴル人民共和国による「干渉」と「煽動」が存在していたという口実でその内部の民族問題を「解決」してきたのである。中国政府と中国人のこうした見解は現在も基本的に変わっていないので、辺境地域における民族問題は国際社会と連動してきた特徴を帯びているのである。

今日、先住民でありながら意図的にその文革中の歴史が抹殺されているウイグル人であるが、皮肉にも北京当局主導の「反恐怖（テロ）」運動の深化に伴い、その文革中のレジスタンスの一端が明るみになった。では、中国政府とその御用学者たちはどのように少数民族側の「恐怖（テロ）」を理解しているのだろうか[16]。

台湾の中華民国中央研究院の若手研究者呉啓訥は新疆ウイグル自治区等の成立過程に関して、鋭い分析をおこなった。呉によると、中共は内モンゴル自治区ではとにかく中国人を大々的に入植させて人口を徹底的に逆転させる政策を取った。南中国ではチワン人を意図的に「民族」に仕立てて漢人すなわち中国人の伝統的な地方主義を牽制する仕組みを作った。そして、新疆では多くの下位の自治州や自治県を設置してウイグル人の自治権を空虚なものに改造するのに成功した(呉啓訥　2009:81)。

---

16) ウイグル人の抵抗をすべて無原則に「テロ」だと決めつけて解釈する最近の文章として、瀋旭暉（2010)、侍建宇（2010)、張健（2010）などがある。

呉の論考は正鵠を射たものであるが、彼に対する批判が最近、中国人から寄せられている。背景には勿論、北京当局の意図があり、そのような代表の一人が新疆大学の潘志平である。

潘志平は大胆にも1944年の「三区革命」は革命でも何でもなく、単なる「民族主義の暴動」だとこき下ろしてから、ウイグル人には民族革命の思想なぞなく、すべて最初からパン・トルコ主義に基づいた民族分裂的活動にすぎない、と一方的に断じている。呉啓訥はパン・トルコ主義という思想的な背景だけでなく、国際共産主義運動のなかにおける民族自決論とも結びつけて、ウイグル人の民族革命について研究してきた。しかし、潘志平は、呉啓訥の理論は成立しないと批判する（潘志平2014:66–80）。潘は、中国共産党自身が掲げてきた民族自決権の過去の政策を完全に隠蔽して、「民族自決権云々とは、ソ連のお説教だった」と弁じている（潘志平2014:72–73）。このように、中国人研究者はウイグル人の「分離独立運動」の背後にソ連があるとしながら、ソ連が標榜し中共も学んだ民族自決の思想を否定しようとするダブル・スタンダードを取っている。中共自身が賞賛し、心酔していた民族自決の思想を切り捨てても、その思想は相変わらず諸民族にとって崇高な理念でありつづけることを抹消することはできないだろう。

現代の中国には二つのナショナリズムがある。対外的には日本を敵視し、アメリカをアジアから排除しようとする国家主義である。そして、対内的には諸民族の生来の自決権を剥奪して同化し、「中華人民（チャイニーズ）」に吸収しようとする大漢族主義である。この二つのナショナリズムは文革中に一時的に階級闘争論の外套を纏って、「民族間の闘争もつまるところ、階級間の闘争である」と言い換えても、実際は漢民族が少数民族を搾取し抑圧する階級間の闘争であったことは、ウイグル人の事例から明らかである。今日においては、漢民族すなわち中国人が諸民族を搾取し抑圧する構図は以前よりもましてきただけでなく、正当な権利主張もすべて「分裂主義的活動」だとされ、苛烈な鎮圧も「反テロ」だと位置づけるようになった。中国はこれからも、国際社会の「反テロ」の潮流に追随しつづけるならば、民族問題の解決も遠のくであろう。ここに、文革の国際社会と連動してきた歴史の現時的な意義が認められよう。

備考:本研究は科研費「ウイグル族・朝鮮族・チワン族の文化大革命に関する実証研究」（研究代表:大野旭＝楊海英　課題番号:15k03036）の成果である。

参考文献

漢語文献

巴岱
2009『浩・巴岱文集』民族出版社。
包爾漢
1984『包爾漢—新疆五十年』文史資料出版社。
本刊編輯部
1980「林彪、江青案起訴書」『匪情月報』第32巻第6期、77–88頁。
蔡国裕
1984「従中共〈民族区域自治法〉観察其少数民族政策」『匪情月報』第72巻第1期、17–24頁。
操青
1968「新疆地区匪情研究分析」『匪情月報』第11巻第7期、20–25頁。
党育林　張玉璽
2003『当代新疆簡史』当代中国出版社。
丁盛
2008『落難英雄—丁盛将軍回憶録』香港星克爾出版公司。
丁望
1967「新疆軍区的人事状況」当代中国研究所『文化大革命評論集』、93–94頁。
方君帰
1969「毛林集団対〈新疆軍区生産建設兵団〉奪権的経過」『匪情研究』第12巻第12期、39–44頁。
郝致遠
1983「中共少数民族政策與民族問題」『匪情月報』第62巻第3期、24–29頁。
厲声
2003『中国新疆—歴史與現状』新疆人民出版社。
馬大正
2003『国家利益高於一切—新疆穏定問題的観察與思考』新疆人民出版社。
人民日報編輯部・紅旗編輯部
1964『蘇共領導是当代最大的分裂主義者—七評蘇共中央的公開信』人民出版社。
潘志平
2014「東突厥斯坦共和国」『二十一世紀』第146期、66–80頁。
司法行政部調査局
1958「新疆民族之分離運動」『匪情月報』7月20日号、45–48頁。

侍建宇
2010「中国的反恐論述與新疆的治理」『二十一世紀』第117期、14–20頁。
瀋旭暉
2010「東突厥斯坦伊斯蘭運動的生態」『二十一世紀』第117期、4–13頁。
宋家仁主編
2004『伊犂哈薩克自治州志』新疆人民出版社。
王力雄
2007『你的東土、我的西域』大塊文化。
呉啓訥
2009「民族自治與中央集権―1950年代北京藉由行政区画将民族区域導向国家整合的過程」『中央研究院近代史研究所集刊』第65期、81–137期。
新疆紅二司宣伝部・『新疆紅衛兵』報編輯部
1967「数風流人物還看今朝」『新疆九・三風暴』(1967年9月14日)。
新疆紅二司新疆大学星火燎原兵団第七縦隊
1967「王恩茂是新疆最大的里通外国分子」『新疆紅衛兵・風雷』(1967年8月24日)。
邢国強
1976「中共少数民族政策之研究」『匪情月報』第18巻第12期、41–46頁。
楊滄浩
1967「当前新疆動乱問題的探討」『匪情月報』第10巻第2号、75–80頁。
張健
2010「新疆問題:族際矛盾還是分裂主義」『二十一世紀』第117期、21–28頁。
朱文琳
1968「透視〈新疆的奪権闘争〉」『匪情月報』第11巻第8期、7–18頁。
鐘民和
2009『一個真実的新疆』人民出版社。

日本語文献

加々美光行
2008『中国の民族問題―危機の本質』岩波書店。
ツェリン・オーセル
2016「殺劫」岩波書店『思想』第1101号、110–133頁。
マクミラン,D. H.
1983「新疆における文化大革命」甲賀美智子訳・加々美光行監修『文化大革命と現代中国Ⅱ―資料と解題』アジア経済研究所所内資料・調査研究部57–2。

水谷尚子
2012「キルギス共和国のウイグル人」『麗澤大学紀要』第94巻、177–218頁。
楊海英
2009a『墓標なき草原―内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』上、岩波書店。
2009b『墓標なき草原―内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』下、岩波書店。
2010『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料2―内モンゴル人民革命党粛清事件』(内モンゴル自治区の文化大革命2）風響社。
2011『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料3―打倒ウラーンフー（烏蘭夫)』(内モンゴル自治区の文化大革命3）風響社。
2012『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料4―毒草とされた民族自決の理論』(内モンゴル自治区の文化大革命4）風響社。
2014『ジェノサイドと文化大革命―内モンゴルの民族問題』勉誠出版。
2015『日本陸軍とモンゴル－興安軍官学校の知られざる戦い』中央公論新社。
2016a「内モンゴルの中国文化大革命研究の現代史的意義」岩波書店『思想』第1101号、72–90頁。
2016b「革命歌・声・発声」岩波書店『思想』、第1101号、2–5頁。
吉越弘泰
2005『威風と頽唐―中国文化大革命の政治言語』太田出版。

反革命修正主义分子、現行反革命分子

依敏諾夫三反罪行言論摘編

第 一 集

新疆烏魯木齐地区工代促进会
区人委机关《捍卫毛泽东思想》战斗兵团
烏魯木齐市印刷厂《紅星》野战兵团
一九六七年十二月

最高指示

民族斗爭，說到底，是一个阶級斗爭問題。

混进党里、政府里、軍队里和各种文化界的資产阶級代表人物，是一批反革命的修正主义分子，一旦时机成熟，他們就会要夺取政权，由无产阶級专政变为資产阶級专政。

反革命修正主义分子、現行反革命分子伊敏諾夫三反罪行言論摘編（1）

編者按：

北京卫戍区和新疆軍区奉命分别逮捕反革命修正主义分子、国民党大特务、現行反革命分子黑賊武光和頑固地方民族主义分子、苏修大特务、現行反革命分子伊敏諾夫，这是自治区无产阶級文化大革命取得决定性的偉大胜利，是战无不胜的毛澤东思想的偉大胜利。

毛主席教导我們：**“民族斗爭，說到底，是一个阶級斗爭問題。”**解放十八年来，自治区在民族問題上，两个阶級、两条道路、两条路綫的斗爭一刻也沒有停止过。这个斗爭是十分尖銳复杂的，也是很激烈的。以伊敏諾夫为首的反革命修正主义集团，是长期隐藏在自治区党、政部門里的一条又粗又长的大黑綫，是一批反革命修正主义分子、頑固地方民族主义分子、里通外国分子，一旦时机成熟，他們就要夺取政权，由无产阶級专政变为資产阶級专政。伊敏諾夫就是这条大黑綫的总根子、总代表，是自治区党内最大的民族分裂主义分子，是地方民族主义反党集团的总头目，是苏修伸向新疆地区的大黑手、大特务，是一个地地道道的資产阶級个人野心家、阴謀家。十八年来，他頑固地堅持資产阶級民族分裂主义，与包尔汉、賽甫拉也夫、扎克洛夫、艾斯海提、帕提汗、賈庫林等人結成地方民族主义联盟，大肆进行反党、反社会主义、反毛澤东思想的罪恶活动，企图篡夺党、政领导大权，在新疆复辟資本主义，变新疆为苏修的殖民地。

解放初期，他瘋狂地反对民族区域自治政策，积极主張

成立“共和国”。一九五七年，当資产阶級右派向党瘋狂进攻时，他在自治区党委五月扩大会議上大放厥詞，煽动、組織和指揮地方民族主义反党集团的干将孜牙、伊不拉音吐尔的、阿·艾沙、阿里夫等人瘋狂地向党进攻，大講特講“民族化”問題。一九六二年，当国际上帝修反刮起一股反共、反华黑风，苏修策划伊、塔边民外逃和伊宁“五·二九”反革命暴乱时，他密謀策划，里应外合，扮演了幕后指揮者的角色。在这場史无前例的无产阶級文化大革命中，他又与反革命修正主义分子黑賊武光勾結一起，到处煽风点火，掀起一股反汉、排汉，制造民族分裂的反革命逆流，妄图为地方民族主义分子翻案，为苏修开脫罪責，破坏无产阶級文化大革命。伊敏諾夫的三反罪行累累，罪恶滔天，罄竹难书。現根据初步調查和部分揭发材料，我們汇编了“反革命修正主义分子、現行反革命分子伊敏諾夫反党、反社会主义、反毛澤东思想言論摘編”的材料，現刊印出来，供广大革命羣众批判。

工促会区人委机关《捍卫毛澤东思想》战斗兵团
烏魯木齐市印刷厂“紅星”野战兵团
一九六七年十二月十日

一、分裂祖国統一，妄图把新疆变为苏修的殖民地

在三区革命时期，他經常叫囂說：“新疆将来会成为苏联的一个加盟共和国”。

他积极支持“五十一人会議”，并主張“在新疆应該成立共和国，并改名为‘維吾尔斯坦’”。

在第一屆全国人民代表大会上，他說：“自治区的职权和一般地区应有所不同，比一般省权力大一些不行嗎？”

“国家通过的宪法为什么不提少数民族成立共和国問

题？”

当中央决定在新疆成立自治区，并在“自治区”前冠以“維吾尔”一詞时，他得意忘形地說：“这一下他們（指党中央）可把一个大西瓜丢掉了。”

二、疯狂地反汉、排汉，恶毒攻击生产建設兵团，破坏民族团結

“汉族人来的太多了，他們得的利益多，影响了当地人民生活水平的提高。”

“生产建設兵团侵占了羣众的土地和水利，給当地人民带来了害处”。

“生产建設兵团的錯誤很大，根本沒有什么成績。”

“生产建設兵团和羣众之間存在着对抗性的矛盾。”

“生产建設兵团应該停止經济建設，将投資交給地方。”

“生产建設兵团不能进行多种經营，除农业以外的其他事业，如工程、运輸、商业等都应該交給地方管理，为地方积累資金。”

“生产建設兵团尊重党委的領导，不尊重政府的領导，是‘第二个政府’，是‘独立王国’，是‘大汉族主义’”。

“生产建設兵团都是汉族人，党是为汉族人民服务的。南疆人民生活苦，党委不关心，但对生产建設兵团照顾得很好。区党委有大民族主义。”

“新疆是維吾尔族的地方，汉族人利用了我們少数民族的土地，新疆变成了中国的殖民地”。

“各民族的收入是不平等的，一个大致的比例是1：3：6，即一个汉族人的收入等于三个哈族人的收入，等于六个維族人的收入。”

“由于各民族收入不平衡，所以社員鬧社，羣众鬧事。”

“新疆工人失业了。工人請假、鬧事問題，是大汉族主义造成的。”

三、反对党的領导，阴謀篡党篡政，妄图实現其个人野心

一九五七年資产阶級右派分子猖狂向党进攻时，他煽动地方民族主义分子說：“国內形势对我們有利，不要怕，应当大讲特讲民族問題，让汉族人睜睜眼睛。”

“民族問題是属于人民內部矛盾范疇的，不要怕，大胆讲”，“我要穿上寿衣讲話。”

“我們在什么地方都可以听到談論民族問題，現在我們戴个民族主义帽子也沒有什么了不起。”

八屆三中全会决定在少数民族中开展整风运动，进行反对地方民族主义的斗爭。他竟明目張胆地反对說：“当前大汉族主义是主要的，应該反对大汉族主义。沒有大汉族主义就沒有地方民族主义。要克服地方民族主义，首先要克服大汉族主义。反对地方民族主义是可以的，但也要反一反大汉族主义。”

“現在不是地方民族主义有所滋长，而是大汉族主义有所滋长。地方民族主义是大汉族主义的产物，只有克服大汉族主义才能消除地方民族主义。”

“党是汉族人的党，不能代表少数民族的利益”，“其他民族的党員不能为我們的民族利益服务。”

“汉族人把党委、人委的工作都管了。”

“自治区党委干予了人委的工作，应該把界綫划分清楚，人民委員会应該有自己的权利。”

"我看副主席只有这么大"（伸出小指头）。

他恬不知恥地說："我是民族主义之母"，"我是想当民族領袖，想当新疆王。"

"我們和馬列主义打交道已經二十多年啦，可以成为馬列主义者了。"

四、大肆鼓吹干部"民族化"，极力推行叛国投修的干部路綫。

"只有各机关做到以民族干部为主要成員，不要汉族干部才算民族化。"

"自治区既然是以維吾尔族为主，那么，主要的干部就应是本地民族干部，特别应是維吾尔族干部。"

"自治区各厅局长、各专县的第一书記，应由民族干部担任正职。"

"我們是个自治区，党委第一书記应是維吾尔族比較好；主要領导部門中的主要負責干部应配备維吾尔族；中央在决定配备新疆的負責干部时，应該把汉族配备为副职，即放在第二职位上，維吾尔族应为第一位。"

第一次党代会选举时，伊敏諾夫說："本来我們的人应該当第一书記，……我們自治区县級以上的党委第一书記都是汉人，为什么不叫維族人担任呢？"

"如果中央把王书記調走，另派一民族书記，或者让賽书記担任第一书記，我是不反对的。維族当第一书記比汉族当第一书記要好得多。"

"我选拔干部的标准，是参加过三区革命的本地民族而又要和苏联有关系的。"

"民族干部有桌子，沒有工作，有責任，沒有权利。"

他含沙射影地攻击汉族干部，到处讲述这样一个故事："有一个哈薩克族的干部和一个俄罗斯族的干部同坐一辆火車，当火車临近哈薩克斯坦共和国时，这个哈薩克族干部对俄罗斯族干部說：'請把坐位让給我。'俄罗斯族干部說：'为什么？'哈薩克族干部說：'已快到我們的境內了。'于是俄罗斯族干部就将坐位让給哈薩克族干部。"

五、反对党的各項方針、政策，竭力破坏社会主义建設

"自治区沒有正确执行民族政策，自治区各項事业的发展不大，缺点是主要的，成績是次要的。"

他攻击党的鎮反政策，竭力抹煞鎮反成績，夸大缺点。他說："在新疆少数民族鎮反中存在着不少問題。"

他反对国务院关于劳改釋放人員两年不考虑其工作的指示。他說："国务院的指示在我們自治区是不适合的。"

"合作化搞快了，搬用了口內的經驗，因而使农民的生产水平降低了，副业也搞得不景气。"

"在合作化以后，农民的生活沒有改善，是因为耕作的方法受到了限制。"

"过去南疆农民除种五亩地外，还要搞付业生产，合作化后付业生产沒有了，所以农民收入減少了40%。"

"外銷服从內銷，粮食、棉花、商品应先供应內銷，如果多出来再出口。"

"很多牧民沒有毡房住，沒有毡子鋪，国家收购的羊毛太多了。"

他反对党的社会主义工业化道路，反对发展国营工业，而企图单独发展地方經济，建設"維吾尔的社会主义。"

他反对国家开发克拉瑪依油田，他說："要克拉瑪依

呢？还是要新疆五百万农民？”

“真正能参加运输的汽車都調到克拉瑪依去了，使市場上物資脫銷，造成供应上的困难，并影响到税收的完成。由于資金积压很严重，貨币不能回籠，銀行也有意見。”

他反对国家修健兰新鉄路，說：“修通鉄路是新疆人民的災难。”

“中央在我区一些事业上投資很少，每年却可得到一千万元利潤，这不应該。”

“領导上对发展少数民族的經济，特别是对发展南疆維吾尔族的經济，重視不夠，民族化作的不夠，沒有解决本地民族中的失业人員的問題。”

六、煽动边民外逃，策划伊宁“五·二九”反革命暴乱

“伊塔地区有不少的先輩是三十年代从苏联跑来的”，“……我們本来生活在一起，赶車走到清水河，永分离”。

“历史上中苏之間这种人口来往帳是无法清算的，如在苏联海参威等地的华侨有几十万人之多，我們要求送回怎么行呢？”

当暴乱分子向伊犂区党委冲击，我战士对空鳴枪警告时，伊敏諾夫声嘶力竭地叫喊：“是誰让开枪的？”并别有用心地說：“哎！在这个时候要有两个营民族軍該多好啊！”

“社員生活很苦，老戶收入被外来戶吃光了，他們沒有饃吃就跑了。”

“伊宁市失业的人太多了，人民生活安排得不好，有些地方每人每月仅有八斤口粮，这怎么夠吃呢？”

“苏修的顚复破坏是事实，但也不能說与解僱干部太多沒有关系。”

“伊宁市工作搞得不好，工作不深入不細緻，市內游手好閑的人多，当地政府沒有安排好他們的职业，生活沒有保障。”

“我的脑子就是轉不过弯来，认为边民外逃是由于生活困难造成的。”

“对問題（指伊宁反革命暴乱）不要扩大，要眞实勿虛。”

他大肆贊揚伊宁反革命暴乱的幕前总指揮庫尔班阿里“在事件中立場坚定，立了功，是个英雄”（庫尔班阿里，原伊犂自治州州长，里通外国分子）。

伊敏諾夫瘋狂地反对毛主席，反对党中央，公开地为伊宁“五·二九”反革命暴乱翻案，为苏修开脫罪責。他在《一九六二年边民外逃的內部因素是什么？》一文中說，內因是主要的。“內因是廢物指揮員王恩茂对苏修采取了投降主义路綫”；“沒有采取任何措施”；“配合苏修，大刮‘返苏风’”，“是一九六二年几万人开始逃苏的准备”；“边境公安局同苏侨协会‘合署’办公”，“打开了方便之門”；“边境地区的基层領导让苏侨掌握”；“在边境公社大量安置汉族自流入員”，“破坏边境地区民族团結”；采取“要走就让走的投降主义路綫”，等等。

七、疯狂地破坏无产阶級文化大革命，为資本主义反革命复辟大造輿論

“在这样的时候（指‘一二·一九’事件），他們（指王恩茂、丁盛等同志）装病不起。要不是装病的話，为什么不出来呢？难道他們全得病了嗎？”

他对武光操纵导演的假夺权，表示“坚决支持。如果再

一次夺权，我坚决反对，坚决不同意。”

“现在保皇派出来說：‘二司夺权的大方向錯了’。这是他們的資产阶級反动路綫的反扑，不能再是别的了。”

“我現在认为王恩茂同我們之間的矛盾已經超过了人民內部矛盾的界限。”

“新疆軍区在支左工作中犯了方向路綫性錯誤。”

“新疆的王恩茂和張希欽，从来就不是毛主席司令部的人，而是一个地地道道的走資派，是中国赫魯曉夫伸向新疆的黑手”，“所以要坚决打倒。”

“左齐在北京对二司說：‘中央的同志认为我支持造反派是对的，让回来工作。我說我不能回去，你們下达正式文件。’”

“左齐給中央写了个报告（关于新疆問題），中央軍委认为很好。”

“武光是区党委干部中第一个发現区党委执行的路綫是不符合毛澤东思想的。”

“我认为武光現在是革命造反派”，是一个“水平很高的干部。”

“武光有无历史問題，这不重要。”

“在三干会上，我同武光划清了界綫。”

“我克服了重重困难，起来造反了，与中国赫魯曉夫在新疆的黑手王恩茂、張希欽之流，彻底划清界限。”

“我現在正站在革命造反派这一边革命。”

“我是一个遭受迫害，站在革命之外，沒有政治权利的干部。

“但是，总有一天，我們要得到权利。”“我将为自己的解放而坚决奋斗。”

特别是最近一个时期，以伊敏諾夫为首的反革命集团，

阴謀策划民族分裂的罪恶活动达到了瘋狂的程度。伊敏諾夫儼然以“民族領袖”自居，凶相毕露，赤膊上陣，策划于密室，点火于基层，又是“讲話”、“声明”，又是編写造謠傳单，无所不用其极，抛出了大量的反党、反社会主义、反毛澤东思想的大毒草，如“造反声明”、“一九六二年边民外逃的內部因素是什么？”、“拜城事件是如何发生的？”“王恩茂在文化大革命中，在民族問題上犯了那些罪恶”、“撕破王恩茂在民族政策方面施放的烟幕”和“給×××、×××的一封信”等等，从政治上、思想上、組織上掀起了一股反汉、排汉，制造民族分裂的反革命逆流。伊敏諾夫之流声嘶力竭地叫囂“不惜一切力量”，“要在民族問題上大干一場”。恶毒地誣蔑王恩茂同志“继承了新疆历史上楊增新、金树仁、盛世才、吳忠信、張治中等人控制新疆的反动的大汉族主义。”他們别有用心地煽动說：“王恩茂在文化大革命中，把斗爭矛头指向了少数民族”；“所謂‘三条黑綫’是敌我不分，反对了党的民族政策，把矛头指向了民族干部”；“由国民党骨干殘余操纵的‘八野’、‘联总’，对民族造反派进行了燒、杀”，是“要报三区革命之仇”。还誣蔑“破四旧立四新”运动是“殘踏了少数民族的风俗习慣，破坏了历史文物和文化遺产。”他們甚至不擇手段，不顾一切地全盘否定一九五八年反地方民族主义斗爭所取得的偉大胜利，誣蔑这个斗爭“使自治权力变成了新疆人民的脚鐐手拷”，瘋狂地为地方民族主义翻案。与此同时，伊敏諾夫还明目張胆地为苏修开脫罪責，叫囂一九六二年边民外逃事件“是由于王恩茂投降主义路綫造成的”，从而把斗爭矛头直接指向了毛主席和党中央，妄图为其实現資本主义复辟，大造反革命輿論。